

コロナ禍は地域博物館に何を残したか —相模原市立博物館の対応とこれから—

相模原市立博物館主事 笠原 彩加
同館総括副主幹（学芸員） 秋山 幸也

相模原市立博物館はコロナ禍の2年半の中で、3度にわたる臨時休館期間があり、再開後も定員の制限や、企画展をはじめとしたイベントの中止など、様々な対応に追われた。しかし、その中でも動画コンテンツの公開や、ブログページでの発信など、柔軟な方法で博物館の活動を継続した。また、学生の実習や小惑星探査機「はやぶさ2」帰還カプセルの世界初公開など、対応を模索しながらも実現できたイベントは多い。結果として、従来継続してきた活動をスクラップした上で、新たなメディアの活用やリモートでの対応などを順応的に取り入れることができた。

1 はじめに

相模原市立博物館（写真1）は平成7（1995）年11月に開館した総合博物館である。地域に密着し、博物館の資料収集保存、調査研究、展示教育普及事業の各領域に市民が参画し、様々な活動を展開している。コロナ禍以前5か年（平成26～30年度）平均の年間入館者数は約13万人であったが、令和2（2020）年3月の感染拡大と緊急事態宣言の発出により3度の臨時休館や、企画展等各種イベントの中止、活動の制限など、さまざまな影響を受け、入館者数は令和2年度が約4万9千人、3年度が約8万4千人にとどまった。令和4（2022）年7月現在もその影響が一部に残る一方で、コロナ禍の代替的な活動として始めたもののいくつかは、新しい活動形態としてポストコロナにおいても継続し、定着しつつある。本稿では、市民とともに歩む地域博物館が、コロナ禍に翻弄されつつ歩んだこの2年半を振り返り、ポストコロナにおける活動のあり方について考える端緒としたい。

2 新型コロナウイルス感染拡大にともなう対応の経過

新型コロナウイルスの感染拡大が顕在化した令和

写真1 相模原市立博物館外観



2年初頭から、令和4年7月までの当館の休館状況や感染防止対策等について表1にまとめた。

当館は相模原市教育委員会生涯学習部が所管する自治体直営の博物館である。そのため、休館をはじめとした感染防止対策は、基本的に神奈川県に対して発出された緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置、それに応じた神奈川県、相模原市の対応基本方針に基づいて行われた。

その結果、令和2年3月2日～6月8日、令和3年1月13日～3月21日、同年8月6日～9月30日の3度にわたって臨時休館となった。また、臨時

表1 コロナ禍における相模原市立博物館の感染防止対策等の対応状況

月	日	対応と経過	
令和2年3月	2日(月)	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため休館(3/15まで)	
	10日(火)	休館期間を延長(3/31まで)	
	24日(火)	休館期間を延長(4/13まで)	
4月	7日(火)	休館期間を延長(5/13まで)	
5月	7日(木)	休館期間を延長(8/31まで)	
6月	9日(火)	緊急事態宣言の解除に伴い自然・歴史展示室のみ再開、一方通行導線の設定 企画展、講座・講演会等は中止 開館時間は午後4時までに短縮	
		プラネタリウム、天文展示室、市民研究室、喫茶室、実習実験室の再開	
	19日(金)	プラネタリウムの定員を40席に限定(通常210席)、投影回数を4回から3回に削減して実施 天文研究室、休憩コーナー、喫茶室、実習実験室の座席を減らして運用	
7月	10日(金)	プラネタリウムの座席数を55席に変更	
	中旬～	市民学芸員活動再開 令和2年度文化芸術振興費補助金(文化施設の感染症防止対策事業)の交付申請	
8月	1日(土)	プラネタリウムの座席数を70席に変更 開館時間を従来の午後5時までに変更	
	初旬～	博物館実習生受入れ	
9月	中旬～	団体受入れの再開(最大人数を70～80人に制限)、大会議室の定員を減らして運用 企画展の再開 生き物ミニサロンの再開(野外) ホームページで動画配信(ネットで楽しむ博物館)開始	
		初旬～	神奈川県「感染防止対策取組書」及び「LINE コロナお知らせシステム」を掲示
		13日(水)	緊急事態宣言の発出に伴い再休館
令和3年1月	29日(金)	常設展示のスタートスイッチを非接触スイッチへ改修	
	3月	23日(火)	まん延防止等重点措置の終了に伴い再開
4月	1日(木)	プラネタリウムの座席数を貸切投影は70～80席から100席に変更 大会議室の人数を最大70～80人から100人程度に変更	
	6日(火)	プラネタリウム投影回数を3回から4回に変更、投影開始時間を変更	
8月	6日(金)	緊急事態宣言の発令に伴い休館	
10月	1日(金)	緊急事態宣言の解除に伴い再開	
	26日(火)	リバウンド防止措置期間の解除に伴いプラネタリウムの座席数を一般投影は70席から100席、貸切投影は100席から従来の定員(210席)に変更	
12月	24日(金)	プラネタリウムの座席数を一般投影も100席から従来の定員(210席)に変更	
令和4年6月	23日(木)	館内の一方通行を解除	

休館を挟んだ開館時においても、プラネタリウムの投影中止、投影回数やプラネタリウム内定員の制限、各分野の講座・講演会の中止、常設展示室観覧導線の一方通行化、休憩コーナー等の利用制限などの様々な対応を行った。

企画展の中止や会期短縮、講座や講演会等教育普

及事業の中止について表2に一覧を示した。企画展は、令和元年度は影響が無く開催できたが(年度末から2年度にかけて開催予定だった企画展は2年度に算入)、令和2年度は各分野の合計で8本、令和3年度は13本が中止または延期となった。講座等は令和元年度が12回、令和2年度は111回、令和

表2 中止、あるいは延期となったイベントの数（のべ回数）

分野	令和元年度				令和2年度				令和3年度			
	企画展 ミニ展示等		講座等		企画展 ミニ展示等		講座等		企画展 ミニ展示等		講座等	
	予定数	中止 延期	予定数	中止 延期	予定数	中止 延期	予定数	中止 延期	予定数	中止 延期	予定数	中止 延期
考古	1	0	20	1	2	1	21	16	3	1	8	2
民俗	8	0	17	1	2	2	8	8	3	1	8	2
歴史	4	0	17	1	8	2	12	8	15	6	14	1
生物	2	0	21	2	3	1	19	12	3	1	17	2
地質	0	0	10	2	1	1	14	14	1	0	8	8
天文	1	0	55	5	4	1	38	35	4	1	25	15
その他	1	0	10	0	2	0	23	18	4	3	5	3
合計	17	0	150	12	22	8	135	111	33	13	85	33

※「中止・延期」については、新型コロナウイルス感染拡大防止によるもの。

表3 コロナ禍における相模原市立博物館利用者数の減少割合

	入館者数		プラネタリウム観覧者数		企画展観覧者数		講座等参加者数	
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
平成26～30年度平均	131,694		55,167		70,493		12,481	
令和元年度	138,573	105	55,195	100	78,289	111	8,962	72
令和2年度	49,770	38	14,323	26	15,275	22	1,542	12
令和3年度	83,550	63	25,700	47	47,727	68	4,995	40

※割合は、平成26～30年度の平均値に対するもの

3年度は33回が中止または延期となった。

当館の来館者数及び教育普及事業の参加者数は、その年度及び実施内容等によって大きく変動するため、単純な比較はできない。しかし、コロナ禍以前5か年（平成26～30年度）の平均値と比較して（表3）、もっとも影響を受けた令和2年度の来館者数は約38%、プラネタリウム利用者数は26%、企画展観覧者数は22%、講座・講演会等教育普及事業参加者数は12%となった。ちなみに当館は博物館法第23条に基づき、入館は無料としているが、プラネタリウム観覧料は徴収している。講座・講演会等は原則として参加費を徴収していない。

3 コロナ禍における具体的な感染防止対策

(1) プラネタリウムの観覧者定員の制限

観覧者定員及び1日の投影回数の推移については表1のとおりであるが、プラネタリウムはその性質

上、密閉された空間内で約40分間を過ごすことになる。このため、感染拡大防止策として、投影の間にはドーム内の換気を行い、座席やひじ掛けの消毒を行った。当初、投影回数を減らしたのは、この消毒作業および換気の時間を見込んだためである。消毒はプラネタリウムの操作に従事する職員（外部委託）及び場内の安全管理を行う職員（同）、さらに学芸員や管理事務に従事する博物館職員も当番制で作業に当たった。

(2) 常設展示室の導線一方通行化と、利用制限

当館の常設展示室は、自然・歴史展示室と天文展示室に分かれている。このうち、天文展示室は内部が狭く、密を避けた観覧や換気が難しいことから、令和2年6月9日～18日は開館中も閉鎖していた。その後は導線を仕切り、換気対策など行ったうえで開室した。

また、自然・歴史展示室は従来より入口から出口へ至る導線の方向性はあったものの、来館者がどちらから入るかは自由であった。しかし、令和2年6月19日から臨時休館を挟み、令和4年6月22日までは、壁面や床面に一方通行を明示し、さらにパーテーションでエントランスの通路を区切った（写真2）。

写真2 再開準備で仕切りなどを設置する職員



エントランスの一部に設置されていた休憩コーナー、書籍やビデオの閲覧設備のある情報サービスコーナーは閉鎖した（現在も閉鎖中）。

(3) 教育普及事業の実施

講演会などを実施する大会議室の定員は200名であるが、令和2年6月以降、定員は最大でも100名としている。また、講座は実習実験室で実施することが多い。この部屋は学校の理科室のような広さと机の配置であり、48脚配置された椅子をすべて使用した状態ではかなりの密状態となる。そのため、内容的に可能であれば大会議室で行い、実習実験室で実施する場合は定員を20名程度とした。

また、野外で実施するミニ観察会の「生きものミニサロン」は、毎月1回定例で実施してきたが、令和2年2月～7月は、臨時休館期間以外でも相模原市の対応基本方針としてイベントは中止の方針となっていたため、中止した。同年8月以降は、臨時休館中は中止したが、開館期間は実施し（写真3）、その際、参加者には連絡先カードを記入してもらい、感染や濃厚接触が判明した場合の連絡体制を整えた。

写真3 ディスタンスを取りながら実施した生きものミニサロン



(4) 団体受入状況

当館は平日に保育園、幼稚園、小中学校等の団体の利用が多く、学校の長期休みの期間以外はほぼ毎日、団体利用の予約がある。その多くはプラネタリウムの学習投影を伴うため、令和2年9月から団体受入れを再開して以降も（表1）、プラネタリウムの団体定員の制限は令和3年10月25日まで続けた（一般投影の制限解除は同年12月24日）。

4 臨時休館期間中の活動

コロナ禍を象徴するキーワードの一つに、「ステイホーム」がある。不要不急の外出を自粛し、遠方への出張や旅行を控える期間が約1年半にわたり続いた。こうした中でも、学びの機会が失われることはあってはならない。博物館として何ができるのか、職員の間で話し合った。その結果、動画や、ブログページを用いた情報をシリーズ化して発信することとなった。ここでは、コロナ禍において始まった具体的な取り組みを紹介する。

(1) 動画の配信

コロナ禍以前にも、動画を用いた教育普及事業のアーカイブや、情報発信が無かったわけではない。しかし、対面で行う事業の中での余技といった程度の位置づけで、本格的な発信はしていなかった。しかし、博物館の臨時休館という事態にあって、生涯学習施設の社会的な使命を果たすにはどのような方法があるか考え、「ステイホーム」でも博物館とつながることができるツールとして動画配信を位置づけた。

臨時休館期間だけでなく、開館期間でもイベント中止期間があり、その間の企画展記念講演会なども動画配信を活用して実施した。その一覧を表4に示す。

この中で、津久井城跡市民協働調査10周年記念「真・津久井城展～戦国の世に黄金を生む城～」は、最初の臨時休館期間に会期が丸ごと入ってしまい、1日も公開できずに終了した。このため、学芸員による展示解説動画を作成し、これを動画配信サイトへ投稿した。この動画は、当該年度内に560回（令和4年7月8日までに702回）の再生回数を記録した。また、同時期に常設展示室内の展示解説を各担当学芸員が行い、それを動画配信サイトに投稿した。さらに、毎年各分野で実施していた講座等の一部も動画に収めるなどし、配信した動画は32本、総視聴回数は8,891回となった。

(2) ブログページのテーマ記事の連載

当館では公式ホームページの他に、ブログページとして、学芸員をはじめとした職員が専門分野にまつわる読み物的な記事や、日々の活動の様子、お知らせなどを発信する「相模原市立博物館の職員ブログ」を開設している。この中で、例えば生物分野による「玄関から20歩の自然」シリーズ（令和2年4月26日～8月7日、全30回）では、「外出」の範疇に入らない程度の、家のまわりでできる自然観察の楽しみ方を紹介した。

また、民俗分野による「写真で見る相模原」シリーズ（令和2年4月15日～令和4年4月28日、全100回）では、博物館建設準備室時代（昭和56年～平成7年）から蓄積してきた市域の年中行事や伝承などにまつわる写真を紹介した。

この他にも随時、動画配信と連携して情報発信したり、開館（再開）に向けた準備などを発信したりして、「休館しているけれど活動している博物館の姿」を伝えることができた。

(3) 標本レスキュー活動

臨時休館期間は、人が集まる活動は休止せざるを得なかった。そのため、一般来館者だけでなく、これまで当館が培ってきた、ボランティアグループと連携した活動もすべて休止することになった。

このような中で、令和2年7月豪雨では、人吉城歴史館（熊本県人吉市）が球磨川の氾濫による洪水被害に遭った。ここには、歴史的な自然史資料である前原勘次郎植物標本コレクション（約3万3千点）が収蔵されており、そのほぼすべてが水没した。これに対し、熊本県博物館ネットワークセンターや国立科学博物館などが被害状況の把握に動き、すぐに全国の博物館等へ支援のはたらきかけがあった。

当館では合計で段ボール箱5箱分の植物標本（330点）を受け入れて、同年7月末から植物分野の専門ボランティアグループである相模原植物調査会の会員と共に洗浄乾燥作業を開始した。ちょうど博物館実習のタイミングと重なったため、作業には実習生も加わった。

相模原植物調査会もほかのボランティアグループと同様、ほぼ活動停止状態が半年近く続いていた。しかし、標本レスキューは不要不急ではないという判断がなされ、例外的に活動を再開できた（写真4）。

写真4 標本レスキュー作業の様子



(4) 博物館実習生の受け入れ

大学教育の一環として博物館学芸員資格を取得するためのカリキュラムがあり、その総まとめとして館務実習がある。当館では毎年、約20名の大学生を実習生として受入れている。コロナ禍において受入れを停止した博物館も多かったが、当館では令和2年度、3年度とも実習生を受入れた。

例年、来館者向けのワークショップや展示解説の実践を実習課題としてきたが、臨時休館中はそうした課題を課すことができず、模擬的なイベント実施や、動画配信への切り替えなどに変更せざるを得なかった。

表4 コロナ禍以降に公開した相模原市立博物館の動画コンテンツ ※2022年7月8日(14:20)時点

	公開開始日	タイトル	視聴回数 (回)※
1	令和2年9月13日	みどころいっぱい博物館の展示室 各展示コーナーの紹介	588
2	9月13日	博物館チャレンジクイズ	①みんな知ってる?相模原の川の台地
3	9月13日		②発見!火山灰の台地
4	9月17日		③勝坂式土器の秘密
5	9月13日		④望遠鏡で見る大迫力の月!
6	10月17日		⑤カラスの種類
7	11月8日		⑥太陽の姿を知ろう!
8	12月12日		⑦物置が語る人々の生活
9	10月9日		真・津久井城展展示解説
10	令和3年1月15日	ネットで楽しむ考古学講座	第1回 旧石器時代編
11	1月15日		第2回 縄文時代編
12	2月11日		第3回 古代編
13	3月6日		第4回 中世編
14	4月9日	考古企画展「変化の時代を生きた縄文人」展示解説	453
15	6月9日	東京オリンピック・パラリンピック関連企画展「相模原にオリンピックがくる」展示解説	247
16	8月9日	生きものミニサロンウェブ版	家のまわりで真夏の夜の自然観察
17	8月20日		ようこそ!小さな昆虫レストランへ
18	9月3日		葉脈標本をつくってみよう!
19	8月12日	相模原町誕生80周年企画展「軍都さがみはら展～国内最大の町誕生秘話物語～」解説動画	前編
20	8月12日		後編
21	8月20日	星空さんぽ	令和3年8月ミニテーマ「木星と土星」
22	9月10日		令和3年9月ミニテーマ「お月見」
23	9月16日	「川尻石器時代遺跡史跡指定90周年記念ミニ展示」紹介動画	215
24	10月16日	JAXA 連携企画展 関連事業 「世界中で月を見上げて過ごす夜」	204
25	10月16日	JAXA 連携企画展 「相模原と月」展示解説	その1
26	10月16日		その2
27	10月16日		その3
28	令和4年1月14日	星空情報	令和4年1月
29	2月6日		令和4年2月
30	3月26日		令和4年春
31	2月25日	考古企画展「古代相模原台地の開発」紹介	184
32	5月8日	相模原市立博物館プラネタリウム紹介(令和4年春)	167
合計			8,891

しかし、資料収集保存に関わる活動は通常どおり実施できたことや、前述の標本レスキューの活動など、例年には無かった業務に携わることができた点で、実習生は十分な成果を得られたと考えている(写真5)。

写真5 博物館実習の様子



写真6 はやぶさ2 帰還カプセルの公開
(令和3年3月12日)



(5) 小惑星探査機「はやぶさ2」帰還カプセル 世界初公開

当館は、道路を挟んだJAXA（独立行政法人宇宙航空研究開発機構）相模原キャンパスと向かい合せの立地を生かし、開館当初から連携を進めている。平成22年には小惑星探査機「はやぶさ」の帰還カプセル世界初公開（同年7月）を行った。

さらに、「はやぶさ」の後継機として、平成26年に小惑星探査機「はやぶさ2」が地球を出発し、小惑星リュウグウから採取したサンプルを携えたカプセルが令和2年12月に地球へ帰還した。このカプセルについても、当館で世界初公開を行うことになったが、予定していた令和3年2月は緊急事態宣言が発令されており、臨時休館中であった。そのため、公開は直前まで実施の可否が議論された。

結果的に、臨時休館中であるが、帰還カプセルのみを限定的に公開することとなり（写真6）、令和3年3月12日～16日の5日間で、抽選により選ばれた4,624人の来場者を迎えることができた。また、令和3年12月には小惑星リュウグウから採取したサンプルの一部を公開した。

5 今後に向けて

令和4年7月現在、当館は観覧導線の一方通行の制限を解除し、プラネタリウムも従前同様の投影形態となっている。毎日、団体利用があり、平日も休日も賑わいが戻った。

しかし、すべてがコロナ禍以前に戻ったかと言えば、そうではない。コロナ禍によってスクラップせざるを得なかった講座やワークショップなどの一部は、再開される見込みがないまま現在に至っている。ただそれは、定例化し、マンネリ化していたイベントのスクラップであり、コロナの有無にかかわらずそうすべきであったものも多い。コロナ禍をきっかけに、事業の見直しを図ることができたと言えるだろう。また、オンラインやリモートによる日常の活動の効率化や、新たなメディアへの展開などを順応的に取り入れつつ対応を模索した結果、コロナ禍で得たものも多い。

ポストコロナの博物館職員は思いのほか忙しい。始動した世の中の動きがシンクロし、例えば他機関から学芸員に要請される講座講師の依頼などが立て続いている。しかし、今後再びパンデミック等による活動休止を余儀なくされることも想定され、その可能性は高い。今回のコロナ禍で培ったスキルや、新たに得られた活動媒体は、その時また必ず役立ち、今回ほど右往左往せずに活動を継続できるだろうと考えている。